

2012年度 国際金融論 ガイダンス

担当 岩村 英之*

2012年4月9日

1 講義の概要・目的

国際金融/国際マクロ経済において最も重要な変数のひとつが、為替レートです。国境を越えた貿易・金融取引の活発な世界では、ある国で起こった政治的・経済的ショックは為替レートへの影響を通じて他国の変化を引き起こし、それがさらに最初の国に跳ね返るというように、各国の政治・経済の間に為替レートを媒介とした密接かつ複雑な相互依存関係が存在しています。本講義の前半では、「為替レートとは何か」といった基本的な問いからはじめ、

- 為替レートはなぜ動くのか
- 為替レートの変動は経済にどのような影響を及ぼすのか

といった疑問に対して、経済学の視点から考察を加えて行きます。ところで、これらの疑問を考えていく過程で、自ずと国際金融現象を考察するときの枠組（「理論」あるいは「モデル」と呼ばれる）が構築されていきます。この分析枠組を習得することこそが、本講義の重要な目的です。また、分析枠組の構築プロセスを体験することで、経済学的な考え方を理解することも可能となるでしょう。

この分析枠組を用いて、講義の後半では

- 為替レート制度の相違は各国経済のパフォーマンスにどう影響するのか（あるいは影響しないのか）
- 実際に各国はどのような為替レート制度を採用し、どのような経験を積んできたのか（国際通貨制度および通貨危機の歴史）

といった問いを考察します。当然、全ての国際金融現象をたったひとつのモデルで考察することはできません。しかし、現在進行中の出来事についても、モデルの射程距離の範囲で考察を加えていきたいと考えています。

なお、本講義は「知る」講義ではなく、「わかる、理解する」講義を目指しています。断片的な事実・命題を提示してひたすら暗記力を問うものでもなく、公式を記憶させてひたすら応用問題を解かせるものでもありません。むしろ、その命題や公式がどのようにして導出されたのかを、最初の一步から端折らずに解説していくタイプの講義になります。これは、皆さんが大学卒業後に求められることは、これまで経験しなかったような問題に対処するために新たに公式を生み出すことだからです。誰かが考えた結果ではなく、どう考えたのかを見ておくことで、本講義は経済学研究を志す以外の人にも意味のあるものとなるでしょう。

*明治学院大学 国際学部

講義スケジュール（予定）

第1回	ガイダンス	
第2回	国民所得統計・国際収支統計	
第3回	為替レートの決定理論：金利平価	分析枠組（モデル）の構築プロセス
第4回	利率の決定：流動性選好理論	
第5回	利率と為替レートの同時決定	
第6回	GDPの決定：45度線分析	
第7回	マクロ経済の均衡：為替レート，利率，GDPの同時決定	
第8回	中間試験	
第9回	開放経済の金融・財政政策	分析枠組（モデル）を用いて政策・制度・歴史を考察
第10回	為替レート変動の長期的傾向：購買力平価説	
第11回	為替レートを固定する：固定相場制	
第12回	為替レートの消滅：欧州通貨統合	
第13回	途上国と為替レート：通貨危機	
第14回	期末試験	

2 前提とする知識（ミクロ/マクロ経済学・数学について）

「マクロ経済学1」の内容を7割程度理解していることが望ましいです。しかし、そこで教えられている内容も含めてこの講義で必要なことは必要最低限復習するので、厳密な意味での前提科目とはしていません。一部、ミクロ経済学の分析手法も用いる予定ですが、これについても最低限は講義内でカバーします。

数学については、高等学校の数2・数Bの教科書レベルを超えることはありません。もちろん、それらについても登場する度に最低限の解説を行います。

国際経済に対するニュース報道レベルの知識についても特に前提とはしませんが、そもそも全く興味のない人はこの講義を履修しないでしょうから、ある程度は知っている（興味がある）ものとして進めていきます。

3 講義のウェブページ

私のウェブサイトはこの講義のページを作成しています。課題・試験等に関する情報は全てここにアップしていきます。配布資料がある場合も、必ずここにアップします。また、2011年度の本講義の様子（試験問題を含む）も知ることができます。

<http://www1.meiji-gakuin.ac.jp/~iwamura/>

4 参考書

- [1] P. Krugman, M. Obstfeld, J. Melitz, International Economics: Theory and Policy, the 9th edition, Addison Wesley, 2011.

世界でもっともよく用いられている国際経済学のテキストです。ほぼ2-3年に1回のペースで改訂されています。前半部分が国際貿易論、後半部分が国際金融論・国際マクロ経済学を扱っています。講義はほぼこの本の後半の内容に沿って進めていきます。講義では、本書で提示されている、為替レートを含めた国際経済の動きを記述する枠組である「DD-AAモデル」を、その構築から適用まで説明します。

- [2] P. クルーグマン, M. オブズフェルド (山本章子・訳) 『クルーグマンの国際経済学 下 金融論』, ピアソン桐原, 2010年。

[1]のひとつ前の版(第8版)の後半部分(国際金融・国際マクロ)の翻訳です。

- [3] 岩田規久男 『国際金融入門 新版』(岩波新書 1196), 岩波書店, 2009年。

新書なので、経済学自体の初心者にもわかるよう丁寧に(「やさしく」ではない。前提知識のない人にも理解可能なように「端折らず順を追って」ということ)書かれています。制度・理論・歴史のどれも十分な解説が成されていて、新書としてはたいへん贅沢な内容です。最初に、短期間で全体像を掴むのに適しています。

- [4] 高木信二 『入門 国際金融』(第4版), 東洋経済新報社, 2011年。

- [5] 深尾光洋 『国際金融論講義』, 日本経済新聞社, 2010年。

- [6] 藤原秀夫, 小川英治, 地主敏樹 『国際金融』(有斐閣アルマシリーズ), 有斐閣, 2001年。

[4][5][6]は、ミクロ・マクロ経済学と経済数学をある程度勉強した人を対象としたテキストです。私の講義に物足りなさを感じた場合、是非目を通してみてください。

- [7] N. グレゴリー・マンキュー (足立他・訳) 『マンキューマクロ経済学 第3版 I 入門篇』 『マンキューマクロ経済学 第3版 II 応用篇』, 東洋経済新報社, 2012年。

国際金融論の大部分は、マクロ経済学を外国との貿易・金融取引が存在するケースに拡張したものです。したがって、マクロ経済学の勉強はそのまま国際金融論へとつながります(実際、本講義の半分くらいはマクロ経済学の解説になります)。本書は、そのマクロ経済学の世界標準のテキストです。“経済学部”3,4年生向けですが、記述が丁寧なのでじっくり取り組めば6-7割は理解できるでしょう。ちなみに、本書は原著第7版の訳ですが、マンキューのブログによれば原著 Macroeconomics は6月に第8版が出るようです。

5 成績評価

- 中間試験（5月28日）と期末試験（7月9日）の点数をもとに最終成績をつけます。「中間試験の得点 $\times 0.3$ +期末試験の得点 $\times 0.7$ 」として総合点を計算し、受講者の得点分布を加味して最終成績を決めます。
- 試験以外の代替的評価は行いません（学則によって代替措置が求められる場合を除く）。いずれの試験も、受験しなかった場合は0点として扱われます。
- 出席をとることはしません。ただし、経済理論の科目ですので、全てのクラスがそれまでのクラスを基礎として成立することは心得ておいてください。
- 試験では、前日に丸暗記して当日一気に書き出すような問題は出題しません。暗記力を問うのではなく、「考え方（理論）」をどれだけ理解しているか、それを講義で扱ったものとは別の問題にうまく適用できるかを問います。

6 質問等

- 担当者は非常勤なので講義の時間以外はキャンパスにおりませんが、講義終了後に数名程度ならば質問をお受けすることができます。声をかけてください。
- Eメールでも質問・相談受け付けます（iwamura@k.meiji.ac.jp）。SFC-SFSの授業ページを通じて質問していただくよりも、上記メールアドレスに直接ご連絡いただくほうが迅速にお返事できます。